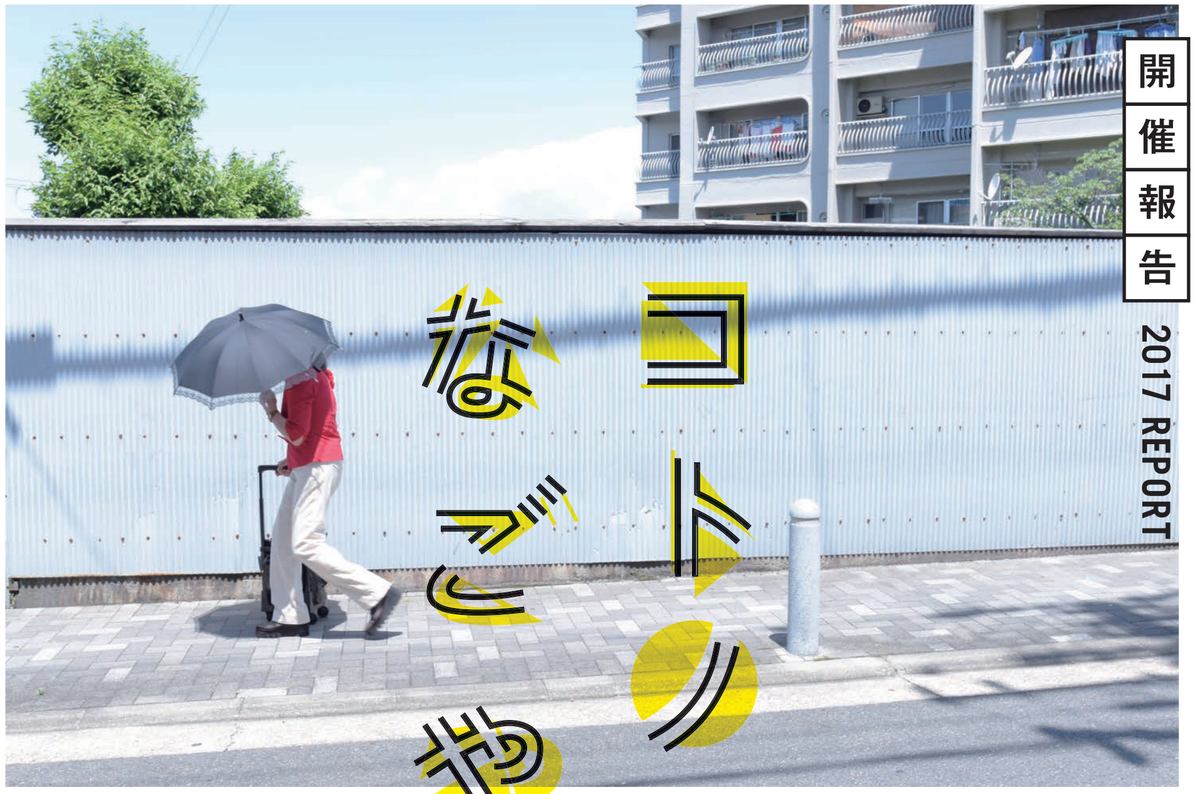


コトノハなごや

KOTONOHA
NAGOYA

開催報告

2017 REPORT

名古屋38℃

吉川トリコ

この春から転勤で妹が東京へ行くことになった。「名古屋には文化がない」と日頃から嘆いていた妹のことだからさぞ喜んでいるだろうと思いきや、「いぎだぐない」と言う。東京なら名古屋でかからない映画も見られるし美術展だっていっぱいやってるじゃん、と励ますつもりで言ったのに、お姉ちゃんはなんにもわかってない、と妹は吐き捨てた。それぐらい私だって考えました、考えた上でめんどくせって思ったんです、名古屋でやってる映画だけでもかなり見逃してるし、美術展だってぜんぶは行けてない、東京行ったらこれが何倍にも膨れ上がるんでしょ？　いちいちチェックして選り分けること考えただけで憂鬱になる、これが二十代前半だったらちがったよ？「東京ウェーイ！」ってハイタッチする勢いで飛んでったでしょうよ、でも三十半ばになってからの東京はきついって、友だちもいない土地勘もない行動力も体力も好奇心もないない尽くしで楽しめるほど東京は甘くない。唾をまきちらす勢いでしゃべっていた妹はそこで息をつき、なんだかんだ言って名古屋ってちょうどいいんだよねえ、とつぶやいた。

それって最上の褒め言葉なんじゃないだろうか。たしかに名古屋ってちょうどいい。町の規模も広すぎず狭すぎず、人も店もイベントもなにもかもが多すぎず少なすぎずでちょうどいいのだ。私も妹も名古屋で生まれ育ちなんとなくずるずる居続けてしまっただけで、確固たるなにかが名古屋にあるわけでは決してない。だけどおそらく、これからも私は名古屋で暮らしていくだろう。「名古屋ウェーイ！」ってテンションには一生ならないだろうし、そのぬるさが気に入ってもいる。過剰にあるより適量がいいってなんだかすごくいまっぽい。

「東京なんていぎだぐない。名古屋ラブ」

失ってはじめて気づいた名古屋のすばらしさに、妹はいつまでもしつこくぐずっていた。

文芸による名古屋の魅力発信事業 コトノハなごや実行委員会
460-8508 名古屋市中区三の丸3丁目1-1 名古屋市観光文化交流局 文化歴史まちづくり部 文化振興室内　TEL 052-972-3172　FAX 052-972-4128
http://kotonohanagoya.jp
コトノハなごや　検索
主催 | 文芸による名古屋の魅力発信事業 コトノハなごや実行委員会［構成団体 | 名古屋市、愛知淑徳大学、(公財)名古屋市文化振興事業団、文化のみち二葉館］
協力 | ユネスコ・デザイン都市なごや推進事業実行委員会、東海学園大学人文学部 安田文吉 特任教授　デザイン | 青木奈美（COUPGUT）　ウェブデザイン | 石垣嘉洋　写真 | 秦 義之　校閲 | 櫻本妙子

はじめに

コトノハなごや
KOTONOHA NAGOYA

文芸による名古屋の魅力発信事業
第1回『コトノハなごや』ニュースレポートをお届けします。
作品募集プログラムに応募いただいた文芸作品（入賞5作と入選15作品）と、
体験参加プログラム、
「コトノハなごやサロン（表彰式と審査員アフタートーク）」の写真を掲載しました。
今回たくさんの応募作品が、日常の気ままな名古屋をことばにして、
名古屋の魅力を見つけてくれました。
あなたが感じている名古屋と、比べてみていただければ嬉しいです。

金賞

トーストホール

里川渦蓮

幼い頃、早朝に僕と弟の二人だけでコメダ珈琲店へと行ったことがある。喫茶店で朝食なんて、カッコイイと思ったからだ。

メニューを見て、僕は早速帰りたくなった。値段が想像よりも高い。一品頼むだけで、駄菓子がたくさん買えるほどだ。

かと言って、何も頼まずに帰るのは失礼だし、なによりも生まれたてのプライドが許してくれない。僕は仕方なくミックスジュースを頼んだ。弟もミックスジュースを頼んだ。

「以上で」と言うと、店員のおばさんがモーニングサービスを勧めてくれたので、それに従った。餡子がつくやつを二人して選んだ。

支払い後のお小遣いの残りについて確認し、その少なさに落ち込んでいたところでトーストとミックスジュースが届いた。

ミックスジュースは壺のような、変わった容器に入っていて、形の物珍しさから弟と一緒に顔を近づけて容器を眺めた。観賞魚の入った水槽を眺めるように。

五分ほど経つと弟のお腹が鳴ったので、容器の観察をやめてトーストを齧った。

この頃の僕らはパンの耳があまり好きではなかったため、真ん中から食べるのが当たり前だった。

一口齧った後、ミックスジュースを飲んでいると、弟は僕のトーストを奪って自分のと合わせた。合体したトーストは中央部分に空洞ができていた。

「なにしてんの？」
「見てる」
「なにを？」
「大人になった兄ちゃん」
「大人の俺はなにしてんの？」
「笑ってる」
「誰と？」
「わかんない。あ、今謝ってる」

おかしな会話であった。でも、この時は何故かおかしいとは思わなかった。

後日、母も連れて来店をした時も弟は空洞を覗いたが、その時は何も見えなくて、悲しい顔をしていた。

そんな弟を見て、やっとあの空洞から見えた光景が非現実的なものだと僕は気がついたが、今はそれこそが間違いだと僕は思う。

何故なら、僕は目の前でトーストの空洞を覗いている娘の姿に、たった今、笑ってしまったからだ。

銀賞

なかなかやるな

エヌアール

突然の宣告だった。嫌がる父を連れて診察を受けに行った大学病院で、病状を告げる医師の声は何処か遠くに感じた。そのまま慌ただしく入院させた個室は、見晴らしのいい高層階だった。眼下には鶴舞公園の桜が綺麗に見えた。

「ビルばっかりで面白味のない街だと思ってたけど、綺麗な公園もあったな」窓から外を眺めて父がボソンと呟いた。

「面白味がない」、私が父によく言われた言葉だ。父と違って名古屋生まれの名古屋育ち、生粋のナゴヤっ子の私が市役所に勤めることになった時も、「面白味のないお前が面白味のないナゴヤに勤めるんか」とからかわれた。「面白味がないんじゃなくて、真面目なんだよ、俺も名古屋も……」小さい声で反論はしたものの、何となく弱腰だった。

医師の言葉を守るかのように、父は段々衰弱していった。痛みもきつくなってきたらしく、夜も上手く眠れないようだった。家族で交代して泊まり込むことにした。ある晩、夜中に急にベッドに起き上がったので、「こんな夜中にどこ行くんだよ、親父」と思わず声を荒らげてしまった。「この窓から飛び降りに行くんだよ」父の好きなブラックなジョークだ。

「残念だったね。この窓は開かないよ。俺は仕事で、明日も朝早いんだから寝てくれよ」「相変わらず真面目でつまんない奴だな」父は苦笑いしてそう言った。

暑い日が続いた。モルヒネで痛みが薄れ、父はほとんど眠った状態になった。そんな中、奇跡的に意識が戻った夜があった。ベッドの角度を少しつけると、父はうっすら目を開けて窓から外を眺めた。ちょうど、海の日だった。遠くに花火が上がってるのが良く見えた。何か言いたそうな父の声に耳を傾けると、「ほう、綺麗だ。なかなかやるな、名古屋も」それが、父と交わした、会話らしい最後の言葉になった。最後に名古屋を誉めてくれたのが、何だか、私が褒められたような気になり少し嬉しく、少し泣けた。

銀賞

私は知っている

福耳劇場

もう10年も前のことだ。「せっかく名古屋に住んでいるのだからナゴヤドームに招待するよ！」と、県外に住む両親を中日・巨人戦に誘った。電話口に出た父は、喜んでくれた後なぜか冷静になって「母さんと相談してから返事をするよ」と一度受話器をおろした。その瞬間思い出した。その頃母は右腕の骨折の後遺症で腕が伸びず、人目を気にして生活していたことを。私はそのことを忘れ、観戦者で賑わうナゴヤドームに誘ったのだった。親孝行の大義名分のもと、そう自己満足のために。後悔した。自分の浅はかさに自己嫌悪に陥った。そんなところに電話が鳴り、「嬉しい、楽しみにしているよ！」と、母の弾んだ声が耳元に届いた。

当日、観戦中の両親は、とても楽しそうだった。どちらが勝ったとか、もはや関係はなかった。さあ帰ろうとドームを後にする。ナゴヤドームとナゴヤドーム前矢田駅とを直結する通路は、帰路につく人、人、人であふれ返っている。私は両親を護衛するかのように前を歩く。も、人の流れには逆らえない。はぐれてしまったやも知れず振り返ると、案の定かなり後方を歩く父と目が合った。私が不安そうな顔をしたのだろう。父は大丈夫だ、と言わんばかりに左手を振った。私はゆるやかに通路の脇に移動し両親を待つことにした。周りの歩調に合わせ、ゆっくりと近づいてくる。あと少しの距離で、人影の狭間に両親の全貌が見えた。父は、守るように左手は母の肩を抱き、右手では母の不憫になった右手をしっかり握っていたのだった。まるでダンスを楽しむ若いカップルのように見えた。私は何だか見ちゃいけないような気がして、合流せずに先へ進んだ。

7年前に父は他界した。ナゴヤドームでの野球中継を実家で観戦すると、母はきまって「帰り、すごい人だったね」と笑顔で話す。そして私は「僕は見ていたよ」と、毎回こころの中でつぶやく。そして、あらためて父の優しさと、母の父への愛の深さを噛みしめるのであった。

佳作

特別な街、日常の街

小賀絢子

社会人になって最初のGW。私は新幹線で名古屋へ向かった。

改札の外で、遠距離になった彼が待っている。卒業式ぶりに見る彼は、ちょっとだけサラリーマンの顔になっていた。

「案内するよ」

少し得意気な彼に連れられ、モーニング付きの喫茶店、お城、動物園、港。色々な所を巡り、一日の終わりに栄の変わった建物で休憩した。

名古屋は、洗練されたレストランのウェイターみたいだった。

（こちら、おススメですよ）

あれこれと珍しいもの、ここにしかないものを運んできては、私を飽きさせない。

ゆらめく水と、街の景色を見てそんなことを考えていると、彼が言った。

「もうお別れの時間だ」

「うん帰るね」

知らない街だった名古屋は、彼と会える特別な街になった。

一人で乗った帰りの新幹線から眺める名古屋は、夜景がきらめいていて、少し胸がぎゅっとした。

数年後、彼は約束通りプロポーズをしてくれて、私は名古屋の住民になった。

「あ、初めてのGWで行った喫茶店だ」

街を歩いていると、ふと、遠距離になったばかりの頃の私たちに出会うことがある。

「本当はさみしい」

あの時は、言えば壊れそうで、押し込めていた気持ち。

変わらない名古屋の街が、それをほろほろとほぐしてくれる。そしてその代わりに、独特な文化が私にまとわりついてくる。

名古屋は、ちょっとおせっかいで濃い性格の親戚みたいだった。

（これからも二人でがんばりゃー）

気取らない、何でも包み込めそうな笑顔で、私たちの背中を強く押してくれている。

買い物帰り、オアシス21で景色を見てそんなことを考えていた私に、夫が声をかけた。

「そろそろ帰ろうか」

「うん帰ろう」

彼と会える特別な街だった名古屋は、夫と暮らしていく日常の街になった。

二人一緒に電車に乗って、同じ家に帰る。窓から眺める名古屋の街は、灯りがともってあたたかかった。

佳作

何年経ってもたまきはる

桜坂の先に校門のあるS高校に通っていた。

名古屋市東部、桜が丘という所である。毎朝私が星ヶ丘の地下鉄出口を出ると、同級生のCちゃんは真ん前にある歩道橋をトコトコと徒歩通学でやってくるのだった。

私とCちゃんは、系列の大学を志望せず外部受験志望という点で、すぐに意気投合したのであった。あの頃の私は生意気にも、

「ここは田舎でもないが都会でもない。とにかくここではない何処（どこ）かへいきたい」

と漠然と思っていた。

そんなある日、私は彼女の進路がアメリカの大学であることを知らされた。家族で移住するという。幼い頃、向こうに住んでいたことがあるから、という事情も地元で小商いをしている両親を持つ私から見れば、憧れのシチュエーションである。はっきり言って羨ましすぎる。私も将来への曖昧な理想を何とか現実にしなければ、と慌てて進路を東京の大学に設定したのだった。

あれから三十年近い月日が経（た）った。私は東京で大学生にはなったものの、卒業後もそのまま居座る理由を見つけられず、地元名古屋にそそくさと戻ってきてホッと息をついた。Cちゃんは現在も彼（か）の地で、家庭も築いた。年に一度帰国するが、実家がないため長野の叔母宅に滞在する。そこに私が会いに行くという形でつき合いが続いているのだ。

今年も

「名古屋土産、何がいい？」

「つけてみそかけてみそ買ってきて」

他にも、納屋橋まんじゅう、千なり、えびせん、天むすなど、私は当然のように持っていく。それをCちゃんは目を輝かせ、むしゃむしゃほおばる。隣にいるアメリカ育ち、中学生の娘Aちゃんはキョトンと見ているだけで、手を伸ばそうとはしない。アジア系の父親を持つ彼女はルックスこそオリエンタルだが、中身は完全にアメリカンなのだとその時思う。そしてCちゃんの中身はうれしいことに未（いま）だ完璧に「ナゴヤ人」だ。

入賞

MINATO FIREWORKS

［名古屋港花火］“めいこう”とも呼ばれる名古屋港。国際貿易港として、また水族館やテーマパーク、商業施設もあるレジャースポットとして、ふたつの顔を持つエリアです。名古屋港では夏と冬に花火が夜空を彩り、季節で見え方感じ方が変わる海辺の花火はとても人気があります。

帰省本能

家城武尚

就職の為に県外から名古屋に舞い戻った。

社会人となり2年が過ぎて3年目。

そう25歳の夏だった。

好きな女性をデートへと誘い、ロマンティックに港で開かれる花火大会で告白をする決意をした。鏡の前に立ち、自分に向かって何度も告白の練習をした。よくよく考えると、鏡の自分に対して愛を叫ぶ光景は、ナルシストにしか見えない。

待ち合わせ場所は名古屋駅で、集合時間の1時間前にあえて到着した。早く会いたいという気持ちもあるのだが、名古屋駅構内に設置された金時計の下で女性との待ち合わせをする事自体が夢の一つだったのである。僕と同様に誰かを待っている人ばかりで、その一員となった事が誇らしかった。

しばらくすると彼女が目に入った。浴衣姿で栗色の髪はアップにされていた。心臓がバクバクと活動を高めた。地下鉄で名古屋港まで向かい、屋台で買ったりんご飴を舐めていると、ヒュルルルと花火が上がり、気分は最高に盛り上がった。告白しようと彼女の横顔を確認すると何か余計な物が写っていた。焦点を少しずらすと、ひげの生えた顔がこちらを向いていたのだ。

そして口が動いた。「おいお前家城だろ」

「あっ」という声が出た。ひげ顔の男は小学校の同級生だった。風の噂では、大学で東京に行ったと聞いた。その隣には北陸の大学や関西圏に行った友人も一緒だった。思わぬ再会に驚いて、皆県外行ったんじゃなかったのか？ 同窓会？と質問攻めをした。結局僕と同様で社会人となり、よく解らない帰省本能に駆られて名古屋に帰ってきたのだった。

その後、彼女には告白も出来ず恋は実らなかったが、幼馴染達と再会し友情が復活した。色々な県へと渡った僕たちが、明確な理由はないけど、なんだか帰ってきてしまう場所、それが名古屋なのだと思う。

そして僕の生まれ故郷が名古屋じゃなかったら、10年ぶりに友人と再会し、毎年名古屋港へ花火大会を見に行く今は無かっただろう。

あの日の花火

山田由美子

吾子二歳花火の音に踊りけり

息子が小さかった頃、矢田川の花火はとても賑やかに行われていました。ひょうきん者の息子は花火を打ち上げる音がするたびにポーズをとって踊っていました。その姿が思い出され、懐かしいです。

海空に咲く花

響野あおい

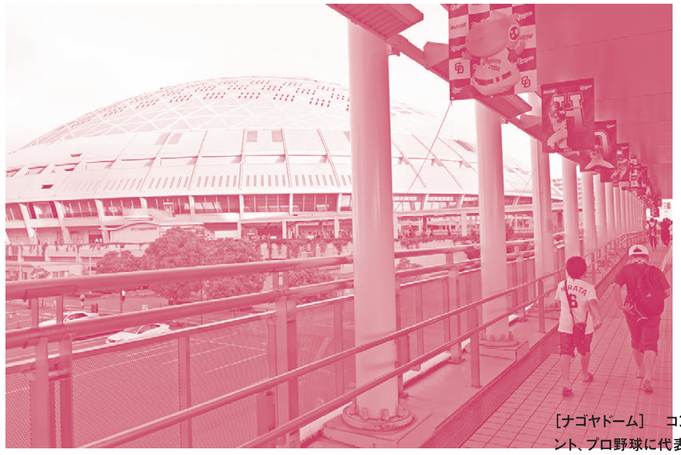
名古屋に夏の始まりを告げる音と光

一夜限りの
海空に咲くその大輪の花々を
ボク等はきっと忘れない。

そのつなぐ手の先が
両親から愛する人に、
そして、守るべき小さな者に
変わったとしても。

入賞

NAGOYA DOME



［ナゴヤドーム］　コンサート等のエンターテインメント、プロ野球に代表されるスポーツイベント、衣食住の祭典など、訪れた人々の歓喜を包むナゴヤドーム。最寄りのナゴヤドーム前矢田駅の地上から延びる通路は「ペデストリアンデッキ」と言い、広場と横断歩道橋としての機能を持っています。

マイ・メモリアル・ドーム

クロマグロ

ナゴヤドームが最近小さく見えるなと、電車の窓越しに思った。自分が大きくなったからだ。いつでもそこにあるドームは何も変わらず見守っている。小さかった自分と、今の自分とを繋いでくれる。

十年近く前、小学校の卒業記念で、ナゴヤドームで行われるドラゴンズ戦のチケットを貰った。名古屋市内の小学校で配られるものだった。チケットをクリアファイルにしまうと、少し誇らしく、同時に嬉しかった。

当日はチケットを大事に持ちながら、ナゴヤドームに向かった。地下鉄からドームへ向かう通路はたくさんの人で埋め尽くされ、まだ背の低かった僕には先が見通せず、人混みに埋もれてしまうみたいで少し怖くなった。

チケットで指定されたエリアはドームの一番上の階で、ドームの広さが目に飛び込んできた。周りを見ると、友達もちらほらいた。青いシャツの集団が下の階を埋め尽くしていた。その熱気と、足がすくむほど大きいドームに圧倒されて、ドキドキしたのを覚えている。

大学生となった今は、毎日のように混雑した電車に乗り通学する。背が大きくなり、満員電車でも人混みに埋もれることはなくなったが、未来を見通せるようになるとワクワクすることが代わりに減った。これから行かないといけない大学のキライな授業や、この混雑した電車の不快感、嫌なことばかりを考えながら電車に揺られている。そんな時、JR大曽根駅の手前で近くに見えるナゴヤドームは、小学校を卒業したばかりの頃を思い出させてくれる。今より小さい自分は人混みに埋もれてドームへ向かったが、その不快感ではなく、これから見るものをただ楽しみにしていた。嫌な今ではなく、未来を楽しみにしていた。

ドームは変わらずそこにいてくれる。今では別人のようにさえ感じる昔の自分が、そのワクワクが、本当にあったことを、いつでもぼくに思い出させてくれる。

少年たちへ

駒瀬知里

20年前「やっぱりこちらのほうがいいなぁ」ドラゴンズが勝って、ナゴヤ球場から、ほろ酔い気分で帰宅の、兄と弟。もうすぐナゴヤドームができるという時期で、臨場感ある、馴染みの球場から、本拠地が変わることは、兄弟にとって、ファンにとって当時、実に寂しいことだった記憶がある。

あれから時は過ぎ、私自身、ナゴヤドームに何度も足を運んだ。野球だけでなく、たくさんのアーティストのコンサート。おしゃれをして、友達みんなとワクワクしながら駆けつけた。屋内とは思えない花火、華々しいスポットライト、日常からかけ離れた世界は、まさに夢の空間だった。子どもが生まれれば、手をつないでヒーローショーにでかけた。子どもは初めてのドーム。私自身も、観客席以外に立ち入ったのはこの時が初めて。この辺りがマウンドかな、往年の選手もここに立ったのかしらと思ったり、コンサートのステージを思い出したり。少し柔らかい踏み心地のフロアマットに、特別な感慨を覚えた。それから、フリーマーケット、展示会、グルメ、マラソン、家族の成長と共に、たくさんのイベントに参加し、たくさんの思い出を積み上げた。

今、目の前を歩く少年たちよ！

声を大にして言いたい。

このドームは宝箱だよ。アート、グルメ、スポーツ、ふれあい、もちろんドラゴンズのことも、たくさんのことを教えてくれる。視野が広がり、夢も溢れるよ。ドームの歴史は、あなたの歴史。一つでもたくさんの歴史を刻んで、豊かな名古屋人たれ。

そして、欲張って願わくば、ドームの素晴らしさと共に、ナゴヤ球場の渋味も是非、味わえる素敵な大人になって。名古屋は、新旧どちらも美しい街だから。

ペデストリアンデッキ

水野大雅

「おじいちゃん、はやくはやく！」

二人の孫が急かす。「ナゴヤドーム前矢田」という大層な駅名の割に、ナゴヤドームまでは、長い長いペデストリアンデッキを歩かされる。反面、その長さが会話にはちょうど良い。多くの人が今日の試合に期待をしながら南へと進んでゆく。ただ、孫に急かされただけでここに来た祖父にとっては、球場と言ったら「ナゴヤ球場」なのだが。

「ドームができて二十年か……、この辺はどんどん大きなものが建ってゆくなあ」

「二十年？　ぼくらまだ生まれていないや。そんな前からあったの？」

「わしにとっては昨日のことだけどなあ」

図書館や小劇場が入った建物、大商業施設、大きな道路。最近は大学までもここに引っ越してきた。

「ねえ、おじいちゃん、ドームができる前ってなにがあったん？」

「大きな工場だなあ。側には路面電車があってな、ずうーっと港の工場の方まで続いていたんだよ。」

港まで続く――子どもたちにとって、ちょっとした冒険心を駆り立てる表現だった。といっても工場地帯であるが。

「その前は、どうなっていたん？」

成り行き上、そういう展開になるとは予想されていたが、祖父は呻くように喉からから言葉がでてこない。

（……飛行機のエンジンを作っていた工場があったんだよ……）

そう呟くのが精いっぱいだった。

口に出せない記憶――戦前この地には、日本の飛行機のエンジンの四割を生産していた一大工場があった。だから真っ先に爆撃に遭ったという、その記憶。欠片が黒曜石のように鋭く喉に突き刺さったまま時が過ぎ行く。言うべきなのか、言わないでおくべきなのか。伝えないといけない歴史だということは分かっているのに……。

そんな祖父の逡巡をよそに、子どもたちは、先に先にと喧騒と光の中へと駆け出してゆく。後ろを振り向くことのない彼らに、祖父は目を細めるばかりであった。

入賞

AICHI ARTS CENTER

［オアシス21と名古屋テレビ塔］ 愛知芸術文化センターの10階から階段を使い11階「展望回廊」へ。ガラス張りのここからはテレビ塔やオアシス21の大屋根「水の宇宙船」、栄の街、名古屋駅までが一望できます。光が多く差し込む昼間も夜景に囲まれる夜間も、開放感があります。

写真のお姉さん

hitomita

社会人になって一年目の夏に、一眼レフを買った。

写真を見るのはずっと好きだったが、ついに「撮る方」へと最初の一歩を踏み出したのだ。雑誌や本を読み漁り、写真の撮り方の勉強をした。カッコいい写真をコンテストに応募して、自分もいつかはフォトグラファーに……なんてことを妄想しながら意気揚々と栄の街に繰り出した。のだが、写真を撮ることは、写真を見ることとも、本で勉強するのとも、全然違う体験なのだということを思い知らされた。最高の構図を見つけても、その一瞬を逃すことなく捉えるのは難しい。まして、休日を思い思いに楽しんでいる人たちにカメラを向けるとなると、何だか人の生活を覗き込んでいるみたいで、それだけでも相当勇気が必要なことだった。

高校生の頃、オアシス21で知らないお姉さんに声をかけられ、写真を撮らせてほしいと頼まれたことがある。写真を学んでいる専門学生で、卒業作品作りをしているのだと言う。私はそのとき、付き合い始めたばかりの彼と一緒にいて、お姉さんに「恋人同士ですか？」と聞かれ、死ぬほど恥ずかしい気持ちで「まあ、そんな感じですね……」とごにょごにょ答えた。写真に写るときにも、なんだか気恥ずかしくて上を向けなかったが、ちらりと顔を上げた一瞬を、お姉さんはすかさずに捉えていったのだった。

あのとき、お姉さんが振り絞っていただろう勇気の大きさが、今ならよく分かる。道行く人に「撮ってもいいですか？」とまだ声をかけられない私のその日の収穫は、かなり遠くから映した噴水で遊ぶ子供たちや、スタバで新作フラペチーノの撮影に夢中になっている女の子たちの後姿……。私のフォトグラファーへの道は、まだまだシルクロード並みに長いかもしれない。あのとき、果敢にも初々しい恋人同士に声をかけたあのお姉さんの夢は、かなっているのだろうか。

あなたも私もこの街の人

ボッシー

「だから何なんだよ、コーヒーにゆで卵って。合わねぇだろ」

「まー、だまされて食べてみやぁ。せっかく寄ってくれとるんだし」

「宮坂、『エビフライ』って何て言う？」

「『エ・ビ・フ・ラ・イ』」

「相変わらずつまんねぇな。だいたい3ヶ月前まで長野生まれ長野育ちだった奴が、にわか名古屋人やってやがって」

「あれ？　そんな名古屋弁？」

「嫁行けねぇレベル」

「やかましいわ。まー、職場が名古屋人だらけだし、仕方ないわ。面白いのよ。うちの上司、荷物持ってると『女性に力仕事させたらいかん！』って、すぐ代わるの。長野じゃ1日5回は雪かきしとったのに」

「古くさっ。今時そんなオッサン絶滅危惧種だろ」

「失礼だが。新卒の子呼ばないで、自分で代わるの。偉いわ」

「ああそうかい。女の子扱い嫌ってた奴がなぁ」

「自分でも不思議」

「毒されてるだろ」

「萩ちゃんに女の子扱いされたら嫌やけど」

「気持ちわりぃ事言うんじゃねぇ、ばか」

「いや、ホント、不思議やわ。名古屋って、外から見るとビックリする事だらけっしょ。なのに、いつのまにかゆるーく、まったり、名古屋の人になっとるんだわ。たぶんだけど、1日住んだら名古屋人だわ」

「へー。俺、1日住ん〝どる〟けど、名古屋人になってねぇぞ」

「なっとるが」

「なってねぇ」

「なっとるなっとる。今、名古屋弁だった」

「うるせえよ」

「萩ちゃんこそ、昨日の朝まで東京におったのに、にわか名古屋人だがね」

「お前がうつすからだ」

「いやー。きっと、街が人に心地いいテンポなんだわ。だから、体がこの空気感になっちゃうんやて」

「まったく、これだから名古屋は。そうやってゆるいから、東京大阪から空気扱いなんだよ」

「ひどいこと言ったらいかん」

「お前だって長野育ちだろ」

「萩ちゃんも東京人だが」

「うるせぇ」

「まーまー、冷めないうちに食べやぁ。小倉おいしいよ」

ランデヴー

クミ

血の赤色が、ほのかに浮き上がる白い肌。

茶色の瞳は、少し伏せている。

僕が見ていることを、君は気づいているのだろうか。

艶やかな赤毛の髪に、そっと手を伸ばしたくなる。

木漏れ日の光と、君の影。

スカートの裾が、風とともに揺らめく。

秋の匂いが、鼻をくすぐった。

ずっと、ただずっと、僕は立ち尽くして、君を見つめる。

時間？

そんなもの、意味はないよ。

二人だけの空間が、ここにはあった。

そう。

二人だけ。

静寂が、僕らを包む。

それでも、君の唇は、何か伝えようとしていた。

僕は、焦る。

君の言葉を聞き逃すまいと、必死になる。

「……ねえ」

声が聞こえた。

「ねえってば！」

「……え？」

僕は驚いて、振り返る。

「いつまで、ここにいるの？」

そこには、純和風の顔立ちの女が立っていた。

「え？　ああ。もうちょっとだけ……」

僕は、バツの悪さを隠すため、メガネを拭いて、かけ直す。

「あなた、この絵の女性がタイプなの？」

女は、上目遣いで、冷やかすように、僕を見た。

「ち、違うよ。あ、あくまで、芸術的な鑑賞の対象物として、純粋に興味があるんだ。

この油絵の筆の運び方は、とても見事じゃないか。

見てごらん。この絵の具の重ね具合、僕には真似できないよ。

とても勉強になるね。色使いも、すごく繊細だし。

うんうん。僕も、いつか、こんな絵を描いてみたいなあ。ホントに」

僕は、いつになく、饒舌に言い訳をしてしまう。

「ふふふ。そういえば、この女性、なんとなく、私に似てるもんね」

女は、小さく笑い、隣の絵へと移動していった。

ここは、愛知県美術館。

笑いながら立ち去った女は、僕の妻。

僕が、今日、この展覧会に来たのは、この絵の中の『彼女』に会いたかったからだ。

そんなこと、妻には、口が裂けても言えないけれど。

こんな僕たち夫婦の様子を見て、絵の中の彼女が、ちょっとだけ微笑んだような気がした。

入賞

SAKURA
NAGOYA CASTLE

［名古屋城と桜］　言わずと知れた名古屋のシンボル『名古屋城』にはたくさんの花木が植えられています。春の桜では、西之丸広場が見どころのしだれ桜、下向きで半開釣鐘状の花を付ける寒緋桜は二之丸で、そして一円でソメイヨシノが楽しめます。

桜色の名古屋城

kubomi

九歳で東京から名古屋に引っ越し、以来四十年あまり両親ともども名古屋で暮らす私にとって、名古屋城は亡くなった祖父と訪れた忘れられない場所である。

金鯱を見上げながら、ワイシャツの袖をまくって歩いていた祖父はまだ若かった。腰に手ぬぐいを巻いて、引っ越し作業を手伝ってくれた祖父といっしょに名古屋城を見に行ったとき、私には転校の不安しかなかった。すると、

「お城があるところに住むんだねえ」

天守閣を吹き抜ける風のように祖父が口にしたのだ。いつも私の琴線に触れることばを投げてくれる祖父の、なにげないひと言だったが、「名古屋はいいねえ」「名古屋はすてきだねえ」という意味にも聞こえたし、単純に「眺めがいいねえ」という意味にも思えた。眺望良し、の意味で受け取った母は「あっちが名古屋駅の方向よ」と話を進めていったが、私の胸の中にはずっと「お城があるところ」が響いていた。地下鉄に乗ったのも、百メートル道路を見たのも初めてで驚きの連続だったが、まだまだすごいことがいっぱい隠れている町なのだと思えてきた。

高学年になってから、写生大会のスケッチで名古屋城に出かけた。お堀を瀬戸線が走っていたこと、金の鱗を盗もうとした者がいたこと、名古屋城にまつわる面白い話はたくさん耳にしたが、私には祖父のひと言にまさるものはなかった。名古屋城の石垣を水彩絵の具でしっかりと描いていったとき、祖父が「孫娘にとって、名古屋がすてきな町になりますように」と祈ってくれたこともおぼろげに感じて、子どもながらに深い思いにとらわれたのである。

祖父は桜が盛りの四月に亡くなった。名古屋城の思い出は、毎年、春になるたびにめぐってくる。

はないかだ

水野大雅

「ねぇ、『はないかだ』って言葉知ってる？」

四月の昼下がり、城のお堀に沿ってそぞろ歩きしていた三歳年下の妻は突然聞きだした。名古屋に嫁入りした彼女。屋根から菓子を撒くやら、嫁入り道具をガラス張りのトラックで見せるやら、名古屋の結婚事情に大層身構えていたそうだが、その実、そんなことは全くなかったフツーの挙式。ただ、夫の祖母に、どこでどう使うのか良くわからない大きな皿を引き出物にしてくれ、と頼まれたことだけが頭に残っていた。

十年経った今、その祖母も鬼籍に入ったが、妻はすっかり名古屋の水にあったようだ。結婚当初は「名古屋に来た友達に連れて行くところなんてないわ～」

「名古屋城？　鉄筋コンクリートの再建なのに"尾張名古屋は城で持つ"ってよく言うわ～」なんて、上方で育った彼女にとってえらく見下した名古屋だったが、暮らしてみるとなんだかんだと便利だそうで、今では街もお店も"ネイティヴナゴヤン"の夫より詳しい。この日も、城を下った柳橋商店街の定食屋が安くて美味しいとかで、妻は夫を連れ出して来たのだった。

「はないかだ？　なんか乗ったらすぐに潰れそうな筏だなあ」

中高ともに男子校。大学も工学部と、風流とは無縁の夫にはこういう答えが関の山。彼女だって想定済み。「あなたって、何にも見えてないよね」振り向きざまに、にんまり言う彼女の黒髪に沿って、桜の花弁が二枚、風に乗ってゆく。

「もう、桜も終わりだな」

「そうかしら、案外そうでもないかもね」

二枚の花弁は、ついたり離れたりしながら、お堀の水面にふわりと浮かび、ゆったりとたゆたってゆく。

遠く天守閣は霾曇りに溶け込んでいた。

鯱に　雌雄のありて　花筏

4月になれば彼女は

大野智

「ここだよね、タモリさんが歩いてたの」

彼が振り返って言った。

ハア。なんてカワイイのかしらん、名古屋人という人種は。放送から半年近く経つのに、彼は名古屋城に来るたび、一等賞をもらった子どものようにはしゃぐのだ。大学入学を機に8年ほど名古屋で暮らしている私も、そりゃあ「ブラタモリ名古屋編」は楽しんだけど、ネイティブ名古屋人の彼ほどではない。

それでも「ブラタモリ」には感謝しなくちゃいけない。

昨日、私は彼と一緒に神戸の実家に帰った。

「ヨシノさんと結婚させてください」のひと言がなかなか言い出せない彼を気遣ってか、父は「ブラタモリ見たよ」と見事なスルーパスを決めてくれた。それからというもの彼は「お義父さんもぜひ名古屋城へ」「春には桜が満開できれいですよ」と、観光大使にでもなったような顔で名古屋ネタを繰り出し、結婚の承諾をゲットしたのだ。

でも父は、桜の話題からの連想か、ときおり考え込む仕草を見せた。ははん、いま父は結婚後の私を思い浮かべてるな。私にはそれがわかった。

「ねえヨシノ」

彼が私の顔をのぞき込んで目を細めた。

「来年の春は神戸からお義父さんたち呼んで、ここで花見だね」

私はこの人と結婚する。ついに名古屋人になってしまう。

名古屋に来てから、何度名古屋城の桜を見たことだろう。その桜も、来年からはいままでとは違ったものとなって私を包んでくれる。

なんたって……。

「ヨシノ、行くよ」彼が手招きをしている。

なんたって。

名古屋城は私の新しい名前で彩られるのだから。

「待って、染井くん」

私は、染井くんが差し出す手に向かって歩き出した。

入賞

KOMEDA COFFEE

［コメダ珈琲］「ちょっとお茶でも」の声があちこちで聞こえてくる名古屋の街。朝は朝刊を片手にモーニング、昼は近所の主婦やお年寄りの憩いの場、商談の場、打ち合わせの場として、夜は待ち合わせや学習の場として、自由自在な使い方が喫茶店文化をはぐくんでいます。

名古屋人への染まり方

フルサワカナ

ご飯党の自分が毎週のようにコーヒーをすすりながらトーストをかじるようになるとは思ってもみなかった。

こうなったのはモーニングという名の朝のお出かけに、娘がどっぷりハマってしまったからだ。

目覚ましをかけずにゆっくり起きられるはずの休日に、仕事に行くのとさほど変わらない時間の出発を強いられるのは辛い。

もう自宅で済ませようと促すが、娘は決してルーチンワークとなったお出かけのキャンセルを許してはくれなかった。

お気に入りの喫茶店でお気に入りのセットを注文し、お気に入りのポーズで写真を撮る。そして先週と代わり映えのしないはずの写真を眺め満足そうに笑う。ココまでが娘の「定番」だ。

今日は特に機嫌が良いらしく、「たまには私がとるね！」と冴えない休日のパパをバシャバシャ撮り始めた。

……やめてくれ。

ちなみに乗り気とは言えないモーニングだが、決して可愛い娘の言いなりになっているわけではない。

平日は朝の挨拶くらいしか顔を合わせる時間がなかったが、喫茶店に向かう車の中で娘は一週間分の会話をしてくれている。大切な親子の時間だ。

園で覚えたのか方言交じりのおしゃべりを聞いていると、娘が我が家の一員から社会の一員にいることを改めて意識させられる。

文化の継承、なんて言えば大げさかもしれないけれど、自分の目の前にはしっかりと名古屋らしさを習得しながらすくすく成長する小さな後継者がいる。ヒトは生きる場の色を取り込みながら自分らしさを造っていくのか、と娘を眺めながら静かに納得する。

ボンヤリしている様子が気に障ったのか、「ねえ！　パパちゃんとして!!」とご立腹の娘にスマホを突きつけられた。

画面には、いかにも名古屋な風景に納まりながらボンヤリしてた顔で写るおじさんが一人。

娘に引っ張られながら、地元に染まるのもまた悪くない。

約束

みなみなみ

「え？　モーニング行ったことないの!?」

「……はい、ないです。コーヒー代だけでトーストとか付くなんて、信じられません……」

「じゃあ、次の日曜日、僕と一緒にモーニング行こうよ」

「……それって、デートのお誘いですか？」

職場の飲み会でのこんな会話から、私と彼とのお付き合いは始まった。コーヒーの香りに包まれた喫茶店で、トーストやゆで卵、サラダを頬張りながら彼と会話を交わすことが、なんだか心地よく感じた。名古屋生まれの彼の案内で、日曜日の朝に名古屋周辺の喫茶店やカフェを巡るようになった。

そんなお付き合いを三年ほど続けたある日。彼は小倉トーストを頬張る私に、素敵な提案をした。

「あのさ……。これからは日曜日の朝、必ず二人でモーニング行くってのはどうかな？」

「……それは、プロポーズってこと？」

「……あぁ、そっか。そうなるね。なんか付き合い始めもこんな感じだったなぁ」

彼はふにゃっと笑いながら、そうつぶやいた。

「もー、大切なことだから、きちんと言ってよね」

「えー、はい。えっと、これからずっと、日曜日は二人でモーニングに行きましょう。子どもが生まれたら、家族みんなで。僕と、結婚して下さい」

夜景の綺麗なレストランでもなく、海の見えるホテルでもない。コーヒーの良い香りに包まれた、少し色褪せたソファのある喫茶店で。

とある日曜日の朝、私たちは「約束」を取り交わした。

この話を君が聞いたら、なんて思うかな。その日がくるのはまだまだ先だけど、今から楽しみだな。私はいつか、君と小倉トーストを頬張りながら、二人の「約束」をこっそり教えるの。パパはきっと、嫌がるけどね。

私はそんなことを考えながら、自分のお腹をそっと撫でた。

こたえ

久未

「りえ子せんせいがよんでくれた絵本でね、とおくから来た王子さまはおひめさまに、ぼくの国でいっしょにくらしませんか、ってさいごいったの。王子さまにおいでっていわれたら、行きたいなあっておもうよね、ママ」

今日は仕事が休みで娘と久しぶりに喫茶店でモーニングをしている。

パンをかじりながら、何気なく話した娘の話にドキッとした。私の記憶の中のあの人がはっきりと脳裏に甦ったのだ。大好きだったひと。

彼とは新入社員研修で出会った。研修には地方出身者も大勢いて関西弁の同期は目立つ存在で、東京出身者は華やかな感じがした。そんな中で彼は物静かで、その場に溶け込むような存在だったが、さっぱりとした彼の顔立ちと福岡出身の彼の素朴な口調に私は好感を持った。

研修が終わり違う部署に配属された私たちはしばらく接点はなかったが、ある時、商品のPRイベントで一緒に仕事をすることになり距離が縮まった。週末には彼と会うようになっていた。名古屋には知り合いもおらず土地勘がない彼を私は色んな所へ連れ出した。彼の好きな野球観戦で名古屋ドームに通ったこともあったっけ。

出逢ってから二年が過ぎていた。私は仕事が面白くなってきて、彼も同じだと思っていた。

名古屋港へ花火を見に行った帰り道、ごった返す人ごみの中で彼は突然「一緒に福岡に来てくれないか」

「親父の調子が悪くて、実家を継ぐことにしたんだ」

あまりにも突然で、私はその場で突っ立ったまま、言葉を失った。私は名古屋を離れられるのか。

私は……。

隣の客席にシロノワールが運ばれてきた。「おいしそう！」娘は大きなソフトクリームを食べたそうにじっと見ながら言った。

「ママ、名古屋にはシロノワールもあるし、名古屋人でよかったね。お姫さまは王子さまと行っちゃったら食べられないもんね」

私はこの子と名古屋の道を歩いている。

開催概要

事業名称

平成29年度 文芸による名古屋の魅力発信事業『コトノハなごや』

開催期間

平成29年 7月18日（火）～12月2日（土）

事業趣旨

なごやの魅力を深掘りする機会を作り、文芸分野、文化、なごやへの愛着を、メディアツールを活用して普及・振興していく。

事業概要

体験参加プログラム（フィールドワークとワークショップ）と作品募集プログラム（作品公募実施）、市長による表彰、文芸を主とした審査員トーク（コトノハなごやサロン）

5月
・実行委員会発足

7月
・公式ウェブサイト公開、参加申込・作品応募受付開始
・フィールドワーク開催（覚王山／揚輝荘）

9月～10月中旬
・ワークショップ開催（白壁／文化のみち二葉館）、作品応募〆切

～11月中旬
・一次審査終了、入選20作品を公式ウェブサイトで発表

12月
・最終審査、入賞作品決定
・コトノハなごやサロン（金山南ビル／インターコモン）
・表彰式、審査アフタートーク、企画展を実施

募集要項

「日常のなごや」の写真5枚の中から、あなたが持っているなごやのイメージに合う写真1枚を選んで、連想する800文字までのエッセイ、小説、詩、短歌、俳句など、ことばと文化、メディア――互いにつながりあって「次の時代の望むことば・文字、なごや」を考える作品を募集。

名古屋港花火

ナゴヤドーム

名古屋城と桜

オアシス21と名古屋テレビ塔

コメダ珈琲

- 名古屋市内及び近郊に在住、在勤、在学などの方。
- 作品タイトル及び本文がアマチュアの方の自作で未発表であり（応募時点で著作権などの全ての権利が応募者に帰属するもの）、日本語の作品が応募できる方。
- 800字以内のテキストで1作品。ひとり3作品まで応募可。なお合作・共作での応募は不可。
- 公式ウェブサイトからの応募を推奨、郵送受付も可。

選考委員

中村 航　作家

1969年、岐阜県大垣市生。大垣市立北中学校、岐阜県立大垣北高等学校、芝浦工業大学工学部工業経営学科卒業。10代の頃はバンド活動をし歌詞や曲の創作活動が好きだった。卒業後、メーカーに就職し、エンジニアとして働く27歳の時に友人に勧められて小説を書きはじめる。執筆活動に専念するため、1999年、29歳の時に退社。2002年、「リレキショ」（河出書房新社刊）で文藝賞受賞。「夏休み」（河出書房新社刊）で芥川賞候補に。「ぐるぐるまわるすべり台」（文藝春秋刊）で野間文芸新人賞受賞、第130回芥川賞候補。著作『100回泣くこと』や『アビクロくんの恋と魔法』は映画化される。アニメ「BanG Dream！ バンドリ！」原案、今夏公開映画『トリガール！』原作者。

吉川トリコ　作家

1977年生まれ、名古屋市在住。愛知淑徳短期大学卒業。2004年、「ねむりひめ」で新潮社「女による女のための R-18文学賞」の第3回大賞と読者賞を受賞。同年、短編集「しゃぼん」にて同社からデビュー。2007年には、「グッモーエビアンニ」を原作とした東海テレビの単発ドラマ『なごや寿ロックンロール～グッモーエビアンニ』が放送されたほか、「戦場のガールズライフ」がドラマ化され放送されている。また、2012年には『グッモーエビアンニ』の映画化作品が全国にて公開。2013年より中日新聞のウェブサイトで名古屋を舞台とした短編小説「名古屋16話」を連載、のち出版。

武田 俊　メディアプロデューサー・編集者

1986年、名古屋市生まれ。法政大学文学部日本文学科在籍中に、世界と遊ぶ文芸誌『界遊』を創刊。編集者・ライターとして活動を始める。2011年、メディアプロダクション・KAI-YOU,LLC.を設立「すべてのメディアをコミュニケーション+コンテンツの場に編集・構築する」をモットーに、カルチャーや広告の領域を中心としたプロジェクトを手がける。2014年 12月より「TOmagazine」編集部に所属。現在、「ライフスタイルメディア『ROOMIE』と、ポストデジタル時代のカルチャーを届けるメディアレーベル『lute』の編集長を兼任中。メディアを活用した地方自治体のまちづくり事業にも携わっている。

写真提供・監修

秦 義之　フォトグラファー

愛知県豊田市出身。『Number』などの雑誌の表紙、矢沢永吉、東京スカパラダイスオーケストラ、氣志團などのCDジャケット、コカコーラ社、アサヒビール、ミスタードーナツなど大手企業の広告の写真を手がける。2014年家族が長年経営していた覚王山の元幼稚園を改装し、家族や子供を撮影する写真家『覚王山スタジオROSSO』をオープン。名古屋ビジュアルアーツ講師、ZIP-FMモーチャーカメラ部顧問。

短評

―― 中村 航
「ここからしか生まれない物語」

眠っている記憶と想像力は、ちょっとしたきっかけで目覚める。例えば今回のような、名古屋のとある風景をもとに何かを書いてみようとする試みとともに。これから僕はトーストホールを見るたび、それを体現したようなこの素敵な物語を思い出すだろう。

―― 吉川トリコ
「街を書くということ」

街を書くのは、とてもこわいことだ。ぼんやりとただ街をうろついているのか、五感すべてを使ってその街の空気を感じ取ろうとしてるのか、ものの見方がまるだしになってしまう。そのぶん人が書いたものを読むのは楽しいのですが。

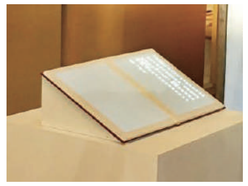
―― 武田 俊
「物語」を生きること

なにげない生活の尊さ。近年そう評価される作品が増えているように感じます。芸術が社会を写す鏡だとしたら、それは何を示しているのか。今回の選考を通じて、改めて私たちはそれぞれ取り替えのきかない特別な「物語」を生きているのだと感じました。

制作物

記念品・缶バッチ

公式ウェブサイト「コトノハなごや」


ユネスコ・デザイン都市なごや実行委員会協力による入賞作品のデジタルデザイン化作品

パンフレット［A3カラー 2つ折り］

コトノハサロン会場

サロン用チラシ［A4カラー］

サロン用ポスター［B2カラー］

広報活動

2017年

7月10日（月）
公式ウェブサイト公開、
公式SNS開始（フェイスブック、ツイッター）

8月10日（木）
審査員・吉川トリコ氏の市長表敬
（『ずっと名古屋』出版記念）

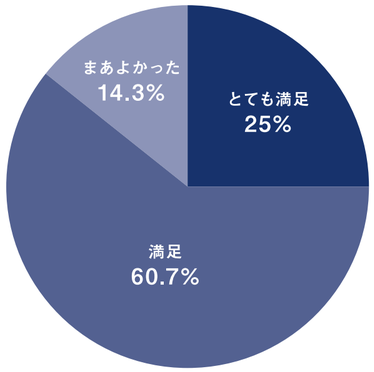
8月13日（日）
ジュンク堂書店栄店にて吉川トリコ氏講演会にてPR

9月13日（水）
読書会全国組織「猫町倶楽部」にてPR

10月21日（土）
名古屋まつり・オアシス21ステージにて実施告知

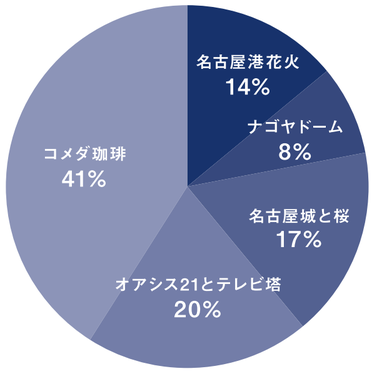
参加状況

プログラム満足度



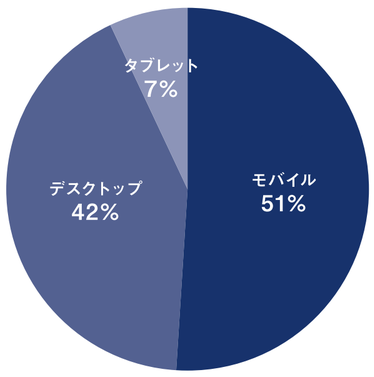
回答 / 82名（うち入選者15名）

作品応募選択画像比率

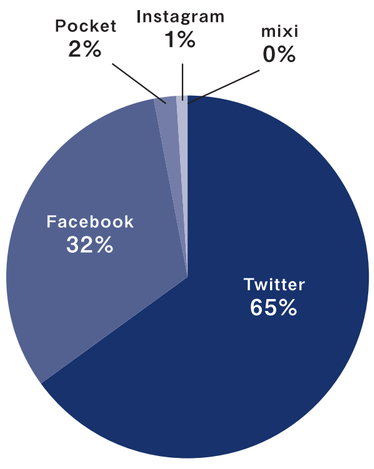


インターネットに関するデータ

デバイスカテゴリ



SNS



ページビュー

上位13位

1	名古屋	939
2	大阪	307
3	新宿区	180
4	横浜	127
5	港区（東京）	104
6	渋谷区	60
7	中央区	39
8	岐阜	30
8	一宮	30
10	京都	28
11	世田谷区	24
12	四日市	23
13	春日井	17
13	豊田	17

測定期間 / 2017年7月10日〜12月10日

■ 総ページビュー数 / 9,169ビュー

■ ユーザー数 / 2,283ユーザー（うち日本：2,217）

メディア掲載

サカエ経済新聞 ［2017年11月28日］

■ スマートコンテスト、登竜門
［2017年7月29日〜9月15日］

■ 中日新聞17面及びウェブ
［2017年11月17日］

中日新聞ウェブ ［2017年8月5日］

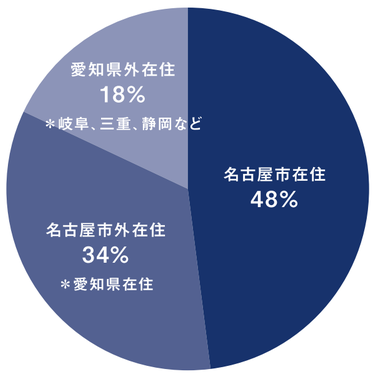
中日新聞 17面 ［2017年8月5日］

公募ガイドオンライン
［2017年8月25日〜9月5日］

ドコモニュース /
みんなの経済新聞ネットワーク
［2017年11月28日］

参加状況

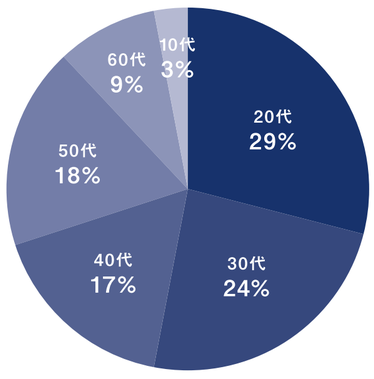
参加・応募者住所内訳



約半数が名古屋市内在住者

→ リアルな名古屋感が描かれた

作品応募年齢層



応募総数 / 168

半数以上が20〜30代

→ 若い世代の名古屋文芸が集まった

OTHER ACTIVITIES

■上：新旧文芸に通じている文学部学生有志の方々（愛知淑徳大学）による下読み分科会　■上右：第1回実行委員会開催　■中右：文学部学生さんへの下読み説明会　■下左：協力書店様でのパンフレット配架　■下中：名古屋まつりでのPR　■下右：お世話になったグッズ

FIELD WORK

講師はフォトグラファーの秦義之さん。覚王山にある揚輝荘と日泰寺参道をメインに歩き、撮影。途中で秦さんからの撮影のコツレクチャーもありました。（7月29日実施）

KOTONOHA SALON

入賞作品を順にプロジェクションにて初公表。会場から歓声や驚きの声があがりました。その後、審査員の方々と作品応募くださった参加者の皆さんと作品への講評・トーク。河村たかし名古屋市長による表彰式も行われました。名古屋ことば（監修：東海学園大学特任教授・安田文吉先生）と入賞作品をビジュアル化した企画展（写真左下）をユネスコ・デザイン都市なごや実行委員会の協力で開催。（12月2日実施）

WORK SHOP

講師は作家の吉川トリコさん。事前に吉川さんからのアンケートを参加の皆さんに答えてもらい、それを元に作品の書き方（構成の仕方など）の実践レクチャー。（9月2日実施）